

令和4年度 第47回「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞作品展

「北の住まい」住宅設計コンペは、当協会の前身である「社団法人北海道建築設計監理協会」の主催で、昭和44年(1969年)8月に「北国の住まい住宅設計コンペ」としてスタートし、今回で47回目の開催となりました。

今回の課題は、「斜めとイエ」です。57作品が応募されました。

設計競技審査委員会において行われた二次審査と公開で行われた最終審査では、米田委員長をはじめとする構成メンバーによって多様な意見と評価・感想が交わされ、慎重かつ闊達な議論の交換が行われました。その後数回の投票の結果、つぎの皆様が受賞されました。

入賞作品のほか委員長による総評、委員による各作品の講評を掲載しておりますので、ご覧ください。

【設計競技審査委員会：構成メンバー】(委員は五十音順)

委員長	米田浩志	北海学園大学工学部建築学科 教授
委員	赤坂真一郎	(株)アカサカシンイチロウアトリエ 代表取締役
委員	小澤丈夫	北海道大学大学院工学研究院 教授
委員	小西彦仁	ヒココニシアーキテクチュア(株) 代表取締役
委員	佐藤 孝	北海道科学大学工学部 名誉教授
委員	澤田貞和	(株)日本工房 会長
委員	松田真人	(株)都市設計研究所 代表取締役

【課題】

「斜めとイエ」

函館、小樽等の坂のまちや美瑛の丘など、道内の至るところに傾斜地が存在します。敷地に高低差があることにより、アクセスのしにくさや、無駄な空間が発生しやすいなど課題がある一方で、住空間に様々な可能性がひろがります。

イエは傾斜地にあることで、周りとの関係が変化し、その見え方も変わってきます。そして、傾斜地にあることにより、住宅内部での垂直方向の「しつらえ」が大きく変化し、イエから見えるまちなみや空と大地の姿が大きく変わってきます。

まちなかや郊外を問わず、あなたの身近にある道内各地の斜めの土地を事由に想定し、今までにないイエのかたちを提案してください。

【賞金】

最優秀賞	25万円	(1点)
優秀賞	5万円	(2点)
委員	2万円	(4点)

【審査経過】

一次審査	10月5日(水)～6日(木)	14作品を選出
二次審査	10月26日(水)10:00～	一次審査通過作品から10作品を選出
最終審査	10月26日(水)13:00～	二次審査通過作品から各賞計7作品を決定

【受賞作品及び受賞者】

最優秀賞作品1点、優秀賞作品2点、奨励賞作品4点は、つぎのとおりです。

賞	作品名	作者	
最優秀賞	坂二黄昏ル虚口船	(共同作品) 武者凌平 塩野谷基悟	北海学園大学4年 北海学園大学4年
優秀賞①	裏坂の社	塩野谷基悟	北海学園大学4年
優秀賞②	斜と暮す 平に住う	国貞佑弥	室蘭工業大学大学院2年
奨励賞①	樽前ガローは輪廻を揺さぶる	三浦光雅	フリーランス
奨励賞②	間を結ぶ家	奥野柊也	北海道科学大学4年
奨励賞③	緩急をもたらす家	尾田美月	札幌市立大学3年
奨励賞④	彼等は此処に根を下ろす	三浦光雅	フリーランス

注) 優秀賞以下の○数字は賞の順位を示すものではありません。



二次審査風景

令和4年10月26日(水)午前
於)設計会館8階A会議室



最終審査風景 (公開形式)

令和4年10月26日(水)午後
於)設計会館8階A会議室



総評

ここ数年のコロナ禍は、コンペ開催方法にも大きな影響を与えてきたが、今年47回目を迎える「北の住まい住宅設計コンペ」においては、ようやく公開審査を含めた対面形式の平常開催となった。このコンペの目的は、北海道特有の風土環境から導かれる住宅形式のあり方を探求することにある。北海道の住宅を考える上で、原自然との関係を創り出すことは大きなテーマになる。今回この観点から、課題は「斜めとイエ」を提示した。斜め(傾斜地)は、より自然性を意識させる要素である。建築には、水平と垂直の要素が組み込まれ、ある意味、人工的な環境が形成されている。そこに、あえて斜め(傾斜地)の要素を積極的に取り入れることによって、新たな自然との対話関係を生み出すことになるのではないだろうか。

今年の応募作品の締め切りは、9月30日(金)であった。応募総数は、57作品で、ほぼ昨年と同数であった。その後、第1次審査を10月3日(月)から6日(木)まで行った。この段階では各審査委員が7票投じ、1票でも投じられた作品を第1次審査通過作品とした。今年は57作品中14作品に絞られた。そして、第2次審査は10月26日(水)午前中に行われ、各作品の特徴を審査委員間で確認をし、投票によって10作品が選出された。その後、同日午後に最終審査を公開形式で行った。改めて各作品に対する評価を行い、議論を重ね度重なる投票の上、10作品から7作品が選出された。この7作品は副賞付の入賞作品となる。さらに、審査を進め、最優秀作品1点と優秀賞作品2点、そして4作品の奨励賞作品が選出された。

最優秀賞作品(武者、塩野谷、共同案)は、初期の審査から評価が高く、全員が最優秀賞と判断した満票作品である。傾斜地として急勾配な崖を敷地と設定しながらも破綻のない空間構成であった。内部空間はスリリングさを含みつつも、崖地の特性に加え、そこから見える海辺の風景と音を十分に享受できる極めて完成度の高い作品であった。そして、優秀賞作品(塩野谷案)は、自然の景色と地形を生かし、森の静寂さを住空間に接続させていた。自然が持つ神秘性が瞑想体験と共振する空間構成であった。描かれていた静謐な空間は、制作者が森と深く対話した結果であろう。もう一点の優秀賞作品(国貞案)は、緩やかな丘に沈み込むかのように配置されていた。内部の各開口部においては、傾斜地と連動し、多様な風景を再認識できる。この空間体験は外部との一体感を生み出し、傾斜地に住むことの可能性を提示していた。奨励賞作品4点もそれぞれに特徴を有した優秀な作品であった。

改めて、斜め(傾斜地)に着目することによって、原自然の存在を再認識する機会になったと想像している。それぞれ具体化された空間からは、人間の身体や精神に影響を与えるような新しい住宅の風景が生み出されていた。このような創造的な姿勢は、新たな時代に向けて大きな可能性を切り開いていくに違いない。みなさんのさらなるご活躍を期待したい。

設計競技審査委員会

委員長 米田浩志

【最優秀賞】「作品名」 坂二黄昏ル虚口船 「作者」 武者凌平／塩野谷基悟



< 講 評 >

小樽市朝里、国道5号線から北の石狩湾に下る急峻な坂地に建てられた住宅である。斜面の形状をトレースした2枚の曲面を、斜面と平行に浮かべ床と屋根とし、その間の空間に水平な床や個室のボリュームを差し込むことによって、日常の生活が営める空間に設えている。

屋根はミニマムサイズの柱で支持されているため、主空間は大きく海側に開放される。四季や一日の時間の流れを通して、様々な表情を見せる石狩湾の雄大なパノラマを堪能しながら、眼下に連なる家々の屋根や灯火、海外沿いを走る函館本線の列車にまちの営みを感じることができる。視覚だけでなく、海風が運ぶ潮の香り、斜面の草木が醸し出す匂い、茂みに棲む虫の音色など、穏やかな日常の情景を五感で楽しむことができる場がここにつくられている。

一方で、荒天時に大きくうねる海面や北から強く吹き付ける雨風は、斜面地という不安定な場に身を置く者に緊張感を強めることになる。しかしながら、自らが身を置く環境に直接身体を晒しながら、五感をフルに動員して様々な場面を感じとることは、現代に生きる私たちが失いつつある人間が本来もっていた鋭敏で豊かな感性を、呼び起こすことにつながるだろう。

坂の下から見上げると、建築とランドスケープが直結された住宅の姿が印象的に映る。現代の住宅が纏いがちな汎用的な価値観に囚われない、荒削りでダイナミックな解放感を味合わせてくれるであろうこの住宅を、全審査員が一致して最優秀賞に推挙した。

設計競技審査委員会

委員 小澤丈夫



<講評>

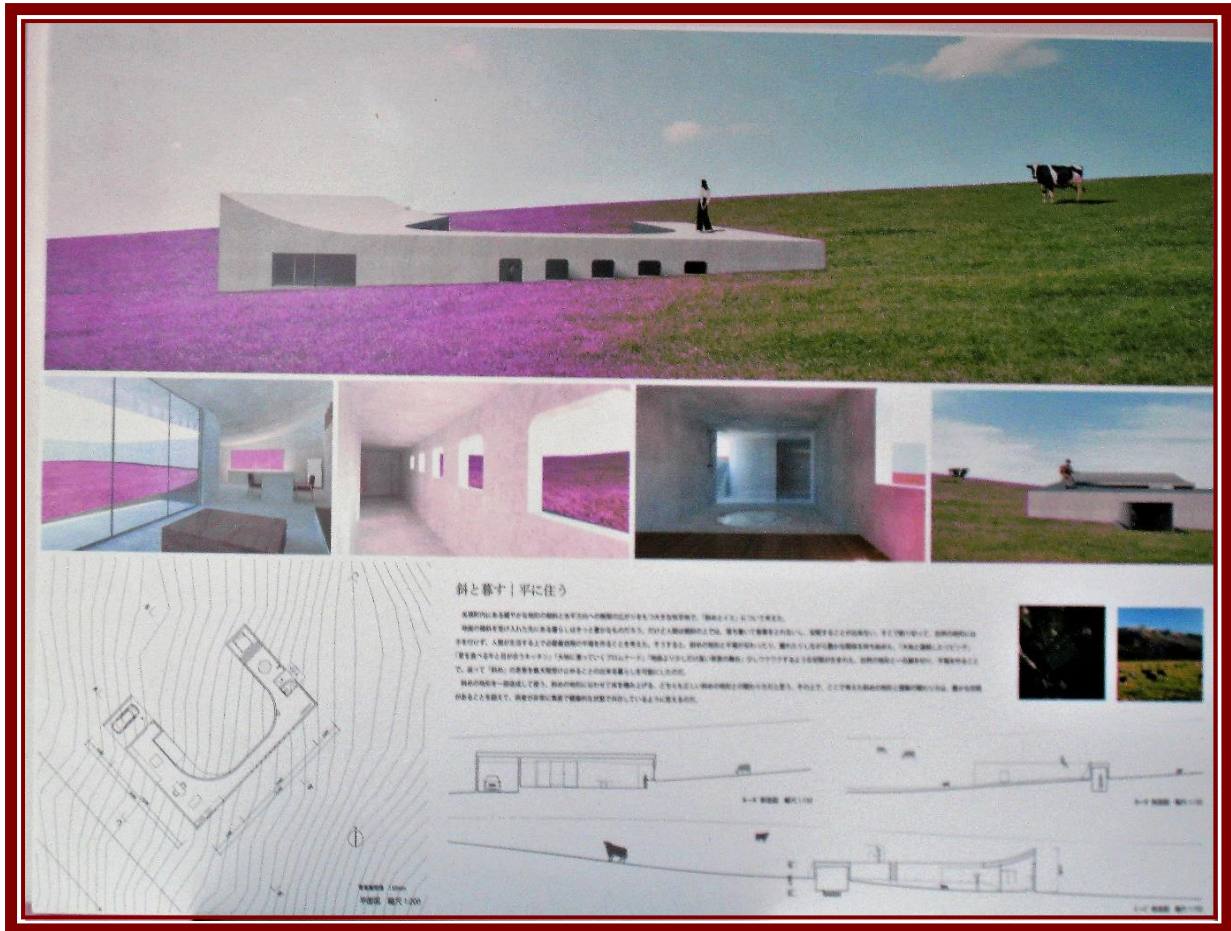
この作品は人を寄せ付けない急こう配の斜面に土木スケールのインフラを架け、このインフラ周りに建築空間をまわりつかせようとする試みです。こうすることで、光や森が、様々な形で建築空間をとおして、住み手の五感に入り込んできています。

元々日本人が持っていた、自然の中のどこにでも神が宿るというアニミズムの精神を感じさせ、日本各地にみられる神々しい森の前面に位置する神社のような香りのする作品です。人を寄せ付けない斜面にあるからこそ、「ヒト」に自然がすり寄ってきて、宇宙(神)に近づくことができているように思えます。更に、階段を上って住宅内を進むプロセスも時間を感じさせ奥行を増しています。

コンセプトは、課題の問いかけに正面からこたえており、大きな可能性を感じさせてくれます。惜しむらくは、平面と断面の不整合や表現不足により最高位を逃しているのではないのでしょうか。

設計競技審査委員会

委員 松田真人



<講評>

美瑛の緩やかな丘の牧草地に計画された住居は、傾斜する地面に対し少し潜らせた平らな床を住むための床とした。平家の家は斜面の高い方は軒が低く、斜面の低い方は軒が緩やかに高められている。家の床は斜面の低い方に合わせてあり、斜面は徐々に高くなり家の半分ぐらいが潜り込んでいる。また平面上はおおらかな中庭を持ち、室内では床と外の斜面が場所により変化する。斜面下の空間は天井が高く中庭に開放された開口部により斜面を抱擁し豊かな空間となっている。中庭を添うように奥に進むにつれ斜面に潜り込み寝室へと到達する。静と動の空間が外の斜面に関係しているのだ。

ミニマムな操作がより水平の床と自然の傾斜を強く関係づけたあたりは作者の力量を感じるが、開口部の操作にもう一考欲しかった。

設計競技審査委員会

委員 小西彦仁

【奨励賞①】「作品名」樽前ガローは輪廻を揺さぶる 「作者」三浦光雅



< 講 評 >

敷地は樽前山の南山麓に広がる森林地帯。人が近よらないような場所である。

ここに画家のためのアトリエ兼別荘を建てる計画。

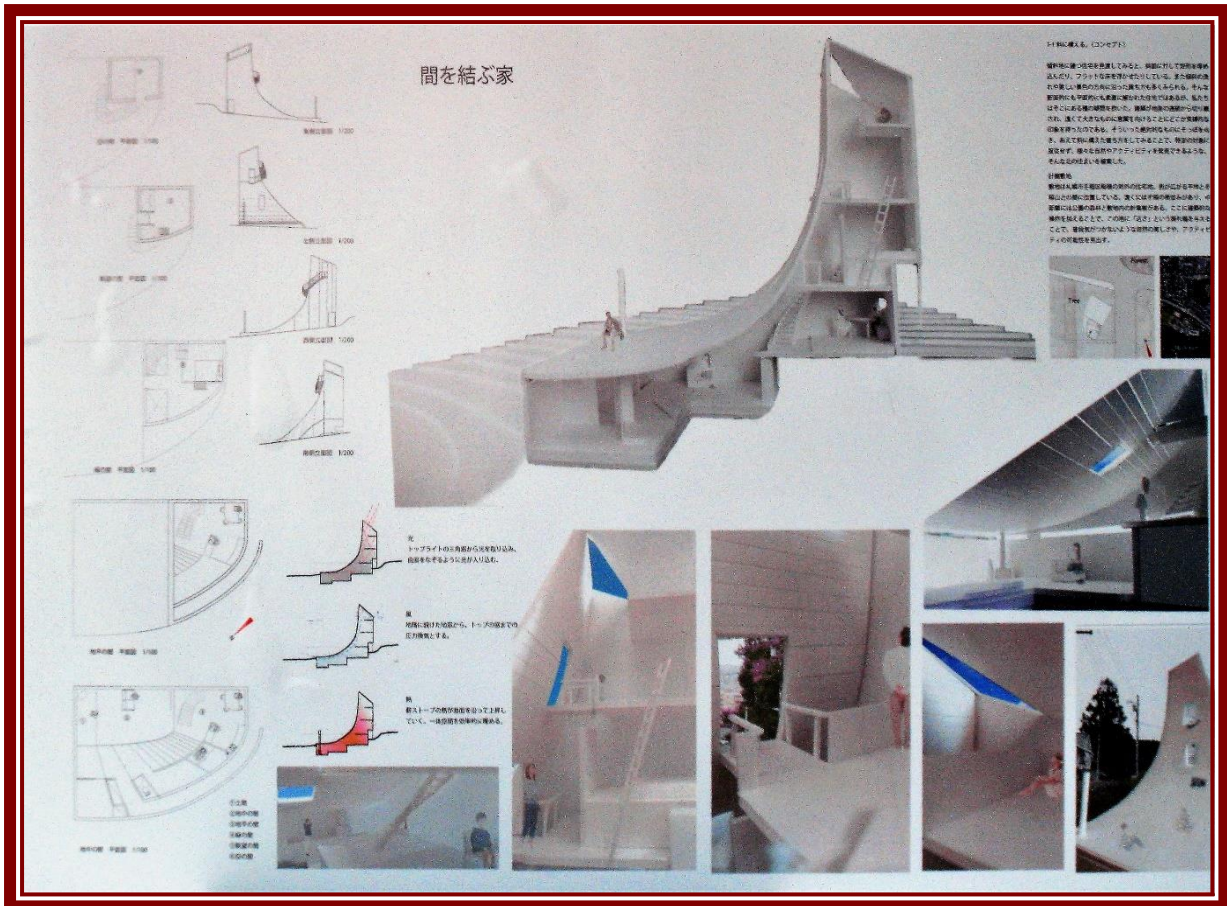
ほとんど誰もいない自然環境に身を置く創作活動の場。間仕切はなく、曲面と変化する廊下幅が場を仕切るプラン。巾の広い部分に創作する場と生活する場があるが、対峙する広大な自然の取り込みを眺めるだけでなく、空間においても係って良かったのではないだろうか。川が流れ苔が生え、空気が湿潤で綺麗で澄んでいるはず。その自然を建築化して欲しかった。図面はとても綺麗に描かれているが中庭が退屈な空間になっている。下に降りて行けるなどの仕掛けがあるとより高い評価になると思う惜しい作品である。

設計競技審査委員会

委員 澤田貞和

【奨励賞②】「作品名」間を結ぶ家

「作者」奥野柊也



<講評>

傾いた地面の一部が隆起し、そのまま搭状に空へと伸びてゆくトポジカルな提案である。特徴的な断面を生かした空間構成に加え、光・風・熱といった要素が巧みにコントロールされ、「地中」のようなやや閉じた空間でありながら住まいとしての快適性が担保されていることが評価された。

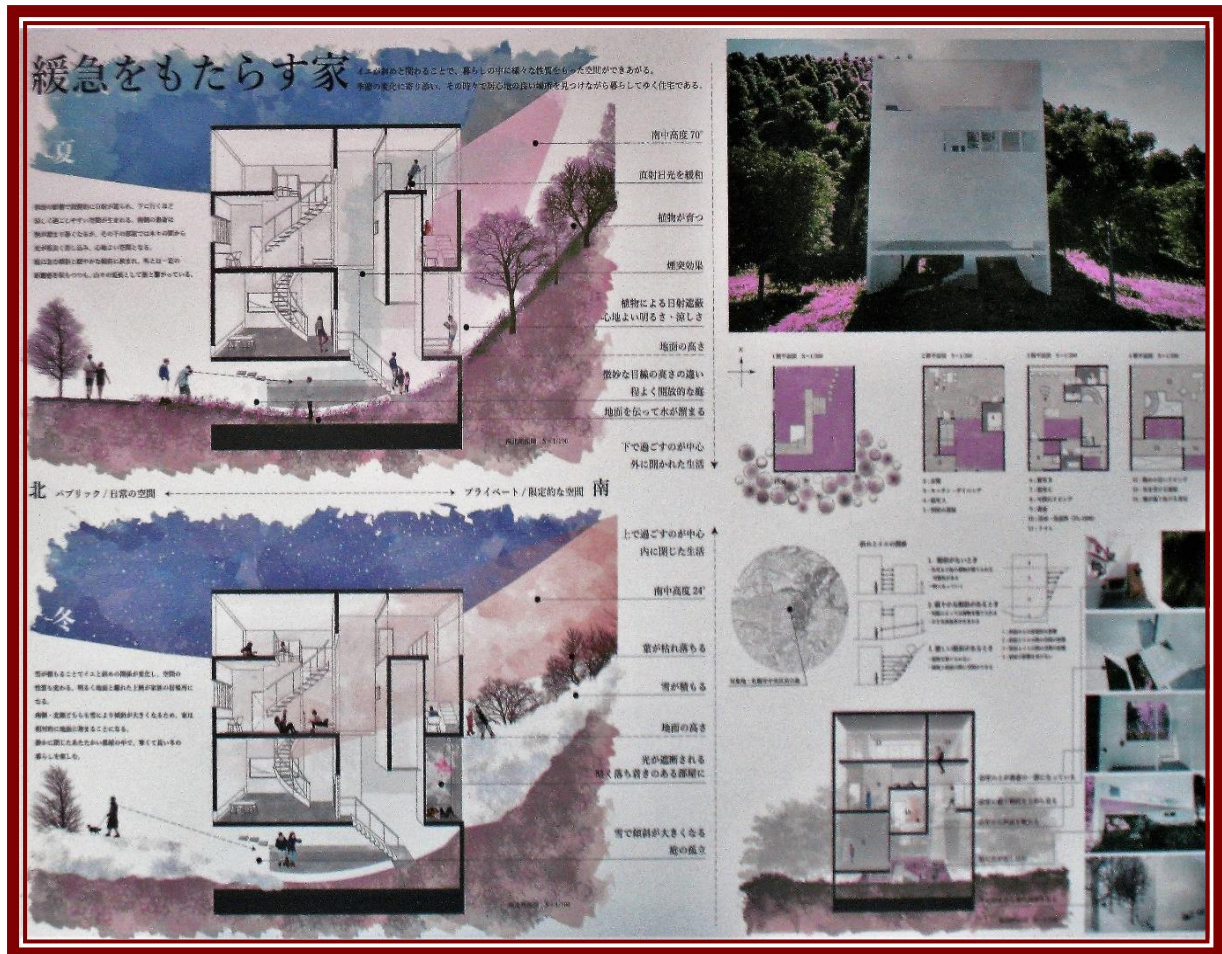
しかしながら、地形、空、植物などのメタファーとも捉えられるこのダイナミックな提案には、住宅地の一角よりもふさわしい敷地が、道内に数多くあったのではないかとと思われる。

設計競技審査委員会

委員 赤坂真一郎

【奨励賞③】「作品名」 緩急をもたらす家

「作者」 尾田美月



< 講 評 >

この作品は、傾斜敷地とイエの関係について、分析的眼差しから生み出した空間であり、傾斜地面と人のアクティビティをもつ建築である。

低い地面に沿ってアプローチすると、いつの間にか家の内側の地面に立つ。見上げると圧倒的な高さの空間であり、季節の風の匂いが抜ける。冬になると傾斜地側の部屋の窓は、雪で埋まるが、積層した雪を透す光はクレバスのようなグラデーションを生む。

この作品には、傾斜地と北海道の四季を凝視した高い解像度がある。しかし基礎耐圧版により、置き土となった点は残念だ。上の賞を狙えた作品であった。

傾斜に建つことの分析とともに、建築空間を魅力とする優れた作品である。

設計競技審査委員会

委員 佐藤 孝

【奨励賞④】 「作品名」 彼等は此処に根を下ろす

「作者」 三浦光雅



＜講評＞

敷地の高低差に屋根を架け、その上を歩けるような湾曲した屋根を持つこのイエは、昆虫をも思わせる個性豊かな計画である。内部は傾斜地のまま床をつくっているため、高さの違う場所だけである。大きな屋根を架けたことにより、内部は半地下のようになり外部との繋がりが少ない。そのためか団らんの空間はひろいが落ち着いて見えない。またダイニングの壁は光が降り注ぎ光を拡散する壁（開口）でも良かったのでは。曲面の壁や湾曲した屋根を持ちながらも、外部空間を取り込んだ場があれば、大切な居住空間をもっと生かしたのではないかと思われる。綺麗な図面でよく考え描かれているだけに、残念で惜しい作品である。

設計競技審査委員会

委員 澤田貞和